

第9章 季節はめぐる

季節はめぐる

思いのままは暮らす事

思いのほかは生きる事

(井上陽水『Summer』より)

梅が咲いた日

平成二十四年（二〇一二年）二月二十九日、今シーズン二回目の雪が積もった。昼間も降り続いたの、家並みも野原も雪で真っ白になった。郵便配達員が郵便物を震える手で置いて行った。翌日は晴れて、気温が十五度まで上昇し、春の陽気となった。梅が一举に開花した。甘い香りだ。朝一番に隣のマーケットに買い物に行くと、西側から黒い煙が立ち上り火事になっていた。目の前を消防車、誘導車、パトロールカー、救急車が通り抜けて行った。

買った物を冷蔵庫にしまうと、散歩に出た。酒匂川の土手は十人ほどのアマチュアカメラマンが、ずらりと三脚をたてて並んでいた。湘南ナンバーの車のほか、品川や川崎ナンバーの車もあった。

富士山の雪は、前にもまして輝く白でした。「今日は、いいですね」と声をかける前に、「あの煙は何だ？ あれがないと、いいのにな、惜しいな」と言っている男の人の声が聞こえた。「火事があったんですよ」「火事だったんですか」。それで会話は終わった。白いロマンスカーが水色の鉄橋を駆け抜けて行った。カメラのシャッターが一斉に押された。みんな満足そうだった。火事の事は忘れられた。

散歩から帰る時、酒匂川の土手には、もう誰もいなかった。お昼のチャイム『みかんの花咲く丘』が響いた。

桜が咲いた日

平成二十四年三月十二日、松田山の河津桜が満開になり、山がピンク色です。三月十一日まで予定だった「まつだ桜まつり」は、三月二十五日、そして四月一日まで延長されました。いつもは二月に咲くのに、今年は寒かったから遅れました。酒匂川の河川敷からシャトルバスが満員の客を乗せて出発して行きます。活気があります。警備員さんは観光客や車の整理に大忙しです。二月は椅子に座って一人ポツンとしていたのに、休んでいる暇がありません。

おばあさんが手押し車を押してやって来るのに出会いました。「こんにちは」、返事がありません。

ん。一人住まいなので誰とも話をしないから、声が出なくなっているのでしょうか。返事がなくてもしかたがありません。

新しくできたケーキ屋さん「丘の兎」に寄りました。いつも客がいません。おばあさんが店番をしていました。前回は二個、ケーキの名前を続けざまに言ったので、最初に言ったケーキがわからなくなり、違うケーキを取りそうになったので、今回は、おばあさんが一個トレーに取ってから、次のケーキの名前を言いました。三個、無事に箱に入れてくれました。三個で千円を出して、おつりをもらいましたが、ケーキは高いなあと思いました。

「小田原に和菓子の『月の兎』という店がありますが、親戚のですか」と聞いてみました。「いえ違います」と、おばあさんがニコリ笑いました。

公園で、いつも絵を描いている男性に出会いました。「こんにちは」と言われましたが、突然だったので驚いて、だまってすれ違ってしまいました。挨拶をすればよかったと後悔しました。

帰宅して夫とケーキを食べました。

「ケーキ屋のおばあさんと話ができて好かったですね。おばあさんは元気でしたか。今日は、注文したケーキを間違えませんでしたか」「ドアが閉まっているのがいけないわ。あれでは客が入りにくい」「ケーキは生ものだから、ドアが開いていたら、室内が暖まってしまうから閉めてあるのでしょうか」「店がつぶれてしまわないか心配だわ」「今年のクリスマスまでもつか」「ケーキ屋には若い女の子の店員がいるのがいいわ」「そうだね。可愛い子がいいね。また行きたくなるね」「そんな事、言っていないわ」。ケーキでお腹がいっぱいになった。ご飯を減らしたかいがな

かった。

白蓮が咲いた日

平成二十四年三月二十九日、白蓮が咲きそろった。春風に揺れ、青い空に輝く白が舞い上がります。私は白い花が好きです。

散歩に行くとき白い杖の男性と、手を引く女性に出会った。すれ違いざまに、「こんにちは」と声をかけた。女性は奥さんのようだった。二人とも「こんにちは」と挨拶した。私は、ルンルン気分になった。

男性だけが馬拉ソンの練習をしていたことがある。酒匂川の土手で休んでいる男性と話した。

「五十歳の時に失明をして会社を辞めました。残念で悔しかったけれど、しかたがなかった。馬拉ソンは若いころから好きでした。練習をし、本格的に伴走者を頼んで馬拉ソン大会に出場するようにになりました。ハワイの大会にも行ったんです」「それは、すごいですね」

「千葉の馬拉ソン大会では、オリンピックク四位だった中山選手とも一緒に走りました。感激でした」「よかったですね」

「でも、次第に僕が速く走るようになると、この辺では速く走れる伴走者がいなくなり、困っているんですよ。馬拉ソンは健康にいいです」「そうですか。頑張ってください。また会いましょう」。

今日は、土手を夫婦で走っていた。春の日差しの中を走り抜けて行った。奥さんは偉い人です。

私は真似ができないと思いました。自分もなにか頑張ろうと思いました。

今日は何の日

NHKテレビで沖縄クイズを放送した。平成二十四年四月三日は、沖縄県が定めた「シーサー」の日だそうです。沖縄名物「ぶくぶく茶」は、米を煎って作る。茶筥で泡立てる。山盛りの泡を飲む。奇妙な飲み物です。

夫婦で沖縄に行ったことがある娘が、「沖縄っていいよね」と言った。私は、その一言を聞いて沖縄旅行の事より、夫婦の仲が嬉しい事を喜んだ。

ミズバシヨウが咲いた日

平成二十四年四月十二日、箱根湿生花園にミズバシヨウを見に行った。神奈川新聞にミズバシヨウが満開と書いてあったので行った。丁度見ごろだった。「この場所に以前からあったのではなく、持って来て植えたんだよ」と夫が言った。尾瀬では五、六月に咲くというから、尾瀬の方が寒いのでしよう。

スケッチを楽しむ集団がいた。水彩クレヨンを使っていた。大きなカメラで三脚を立てて、本格的に写真撮影をしている人もいた。立札に「とってよいのは写真だけ」と書いてあった。感動したので立札の写真を撮った。「面白い。なかなかいいね」と言うと、夫が「国立公園では、どこにでも同じような立札がある」と平気で言い、私の感動を壊した。

ミスバシヨウ、カタクリ、ニリンソウが満開だった。カエルとウグイスが鳴いた。

「童謡『蛙の笛』の蛙は、このカジカガエルだよ。『カジカガエルではないか』と言う川田正子さんの説が正しい」「ウグイスは、『ホウ、ホケキヨ』と鳴く。この聞きなしは、『法、法華経』と書くのです」と夫が言った。

『聞きなし』は、生物用語です。動物の鳴き声を人の言葉で表すことをいいます。コジユケイは「ちよつと来い」、ホトトギスは「東京特許許可局」、キリギリスは「チョンギース」「ギョツチョン」と聞こえたりします。箱根の晴天の一日を楽しんだ。今日はよい日だった。

◆童謡『蛙の笛』の蛙は、シュレーゲルアオガエルが最も近そうですが、モリアオガエルの可能性もすてきれません（平成十一年・千葉県中央博物館「かえるのきもち」展より）。

童謡の会で箱根湿生花園のミスバシヨウを紹介した。そして、「入場券は、六十五歳以上は百円の割引でした。私たちの前に並んだ三人の女の人たちが、『割引だって、よかったわね』と大喜びしていました。六十五歳以上の割引が、これほどうらやましかった事はありません。しかたがないので、私と夫はアイスクリームの割引券を使ってソフトクリームを食べました」と話すと爆笑になった。

ヒバリが鳴いた日

平成二十四年四月二十二日、酒匂川の河川敷の上空をヒバリがさえずっている。高く羽ばたき

ながら鳴いているのは一匹だけなのに、けたたましい。男の人が散歩に来たので、「ヒバリですよ。ほら、あそこ」と言ったが、見上げてても、真上なので、わからないようだった。

男の人は、両耳からイヤホンをはずした。

「歌を聴きながら散歩をしているんです。聴いてみますか」「わあ、いい声ですね」「僕が歌っているんです」「えっ、若い頃の歌声ですか」「今の声だよ。みんなが、うまいと言うんだ。カラオケで歌ったのを録音している。次に、ここをこう歌おうとか、出だしをはっきり歌おうとか考えながら聴いている」。

「のど自慢に出るといいですよ。以前、南足柄に来ましたよね」「小田原にも来たことがあったな」「この歌、知ってるか」。また、イヤホンを渡されても、わからなかった。「次のこの曲は?」「わかりません。何という曲ですか」「『涙唄』というんだ。あなたも歌うでしょう」「ええ、少し」

「僕は、年齢が上だから『白い花の咲く頃』とか『水色のワルツ』とか『さくら貝の歌』なんか好きで歌うんだ」「歌は、いいですよ。松田町出身の北川大介という歌手がいますよね。歌手は、いつも同じに歌えてすごいですね。北島三郎とか布施明とか、まだまだ歌えますね」「それが、プロってものよ」。

「私は新沼謙治の『津軽恋女』(♪降り積もる雪 雪 雪また雪よ。津軽には七つの雪が降るとか)という歌が一番好きですね。ところで、奥さんは散歩をしないのですか」「ウチのは、もう五年も前から寝たきりで、話しもできない。僕が全部面倒をみている。食事の世話やトイレもさせている。時々、頭を撫でてやったり、テープの歌を聴かせたりしている」「それは、偉いですね」。

普通は施設に入れてしまいますよね」施設は、一対一で面倒を見てくれるわけじゃあないからね。みんな一緒くたじゃ、かわいそうだ。だから、僕が百姓をしながら面倒をみている。昔は、元気でシャキシャキしていたんだがな。大好きだよって、チュウをしてやったりするんだ。自分は、時々気晴らしにカラオケに行く」。

この男の人が言うように、高齢者介護施設では一対一で決まった介護士が面倒をみてくれるわけではない。入居者に対して介護士の数が圧倒的に少ない。国で定めた介護士に対する給料も少なすぎる。給料が少ないので、若者は介護の仕事につこうとしない。介護・介護士の質が低下している。

どこの家にも、一つや二つ問題があるものです。私が他人なので、男の人は家の事情を話しました。だれかに話したかったのでしょうか。聞いてよかったです。男の人は、私の事を何も聞きませんでした。地元の演歌歌手・北川大介の事も知っているはずなのに何も意見を言いませんでした。心に余裕がありません。これからも、長い介護生活が続きます。大丈夫でしょうか。歌が救いです。「では、また」と言って別れました。一期一会です。もう会う事はないでしょう。

河川敷のグラウンドでは、中高年と青年の野球チームの対抗戦が行われていた。パコーンという鈍い音がして歓声が上がりました。二塁打です。

帰宅してテレビをつけるとNHKのど自慢(長崎県南島原市からの中継)が始まっていました。ラストはタクシーの運転手さんです。前川清の持ち歌『愛がほしい』を歌いました。「トああ雨の夜は だれか酔わせてください」ひと声聞いただけで、「おお、いい声、合格だな。この人

が今週のチャンピオンだ」と思っていると、合格の鐘が鳴った。「やっぱりね」。

ゲストの、ささきいさおが「抜群の安定感でしたね」と、ほめたたえて今週のチャンピオンのトロフィーを、タクシーの運転手さんに渡した。

ゲストの長山洋子の歌声は会場を魅了した。プロはうまい。最後は、ささきいさおが『宇宙戦艦ヤマト』を歌った。お客さんの心をグッとつかんだ。私も手拍子をして、最後の『♪宇宙戦艦、ヤー、マー、トー』の所を一緒に歌った。今日、酒匂川の河川敷で出会った男の人も、のど自慢を観ただろうか。

奇声を聞いた日

朝、奇妙な鳴き声を聞いた。今まで、一度も聞いた事がない鳴き声だ。「何の声かしら？」と私が聞くと、夫が「なにも聞こえませんね」と、いつものように、とぼけた。

昼、また奇妙な鳴き声を聞いた。夫が「鳥ですわね」と言った。「鳥に決まっているわ。鳥の名前を聞いているのよ」。会話は、これで終わった。

午後、私が主宰している「あしがら童謡の会はとぼっぼ」の指導に大井町生涯学習センターに行った。途中、農家の人々が田を耕したり、田植えをしたりしていた。カルガモに混じって、キジがいた。すぐ、キジだとわかったのは、昔わが家にキジのハクセイが、いくつもあったからだ。私は、「奇妙な鳴き声は、これだ」と思った。キジは田んぼのあちこちで鳴いていた。「ケーン、ケーン」と鳴っていた。

私は、キジの鳴き声が聞けるほどの田舎暮らしに満足している。ここは東京にも箱根にも近い。富士山、丹沢が見える。湘南の海もある。平成二十四年五月十三日、今日は「母の日」。童謡の会が終わった四時、まだキジが鳴いていた。農家の人々も田を耕していた。昼間が長くなっている。夜、夫にキジを観た話をした。夫が、「そういえば、ピアノの部屋や八畳間、本棚の上、大きい方の図書館などにあつたキジのハクセイは、どうしたでしょうね」と言った。「五年前、家をリフォームする時、全部捨てたわ」。二人共、口には出さなかったが、もつたいない事をしたと思つた。そして、「日本昔話の『キジも鳴かずに撃たれまい』は、一つも救がない話だね」「そうだね」「日本昔話の中で、一番の悲劇だね」と話した。

キジは、日本の国鳥。一九四七年（昭和二十二年）に日本鳥学会において国鳥に選定。この事は知らない人が多い。

童謡『雨』（作詞：北原白秋 作曲：弘田龍太郎）「♪雨がふります。雨がふる。けんけん小雛子が今啼いた、小雛子も寒むかろ、寂しかる」（白秋が小田原に住んでいた時の作品）。

キジは、雨の日には啼きません。雨がやむと、待つていたかのように啼きます。北原白秋は小田原に住んでいて、キジが啼くのを聞いた事があつたので、思い出して書いたのですが、これは正しくない。

金環日食の日

平成二十四年五月二十一日、朝六時半に門の所の新聞受けまで傘をさして新聞を取りに行った。

雨で金環日食は観る事ができなかった。小田原、箱根は雨だった。東京、横浜、川崎、平塚などでは観る事ができたようで、今日の一番のニュースだ。政治・経済（「原発再稼働検討」「消費税引き上げ」「後期高齢者医療制度廃止」「最低保障年金の創設」「低所得者対策」……）より先に、「ダイヤモンドリング」が繰り返し放送された。日本国民はのん気だ。

雨は午前九時までにはやんだ。マーガレットが初夏の風に揺れる。白い波が庭一面に輝いている。「庭が広いから、こういう事ができるんだよな。癒される」と郵便局員がしみじみと言った。「みごとですね。いつも観させていただけます」と通りがかりの女の人も言った。マーガレットの花畑は自慢の庭です。金環日食は観る事ができなかったが、いつもと同じ平凡な一日が終わった。私は、それが嬉しかった。

東京スカイツリー開業の日

平成二十四年五月二十二日、自立式電波塔としては世界一の高さ六三四メートルの東京スカイツリーがオープンした。

「スゲー」「デケー」「タケー」「ヤベー」「コエー」と、若い歌手、人気タレント、お笑い芸人が一斉に叫んだ。それで感想が終わった。スタジオにいる女性アナウンサーが「何かコメントしてください。お願い」と言ったが、もう言葉がなかった。この日は雨で、何も見えなかった。

テレビで繰り返し聞いた「おしなり商店街」と、ゆるキャラ「おしなり君」と言う言葉が耳に残っている。私が「一度は登りに行きましょうね。来年は行くぞ」と言うと、夫は「行くつもりはな

い、興味なし」と言った。夫は決して「そうだね」とは言わない。意見が合った事がない。私が「つまらない人ですね」と言うと、「そんなことはない。興味がないと言っただけです。それなら温泉にでも行くか」「温泉なんか行きたくないわ。温泉旅行に行きたいという人の気が知れないわ」。今度は夫が「つまらない人ですね」と言った。「今バスで一緒に話をしていた人と、素っ裸になつて風呂に入るなんて、絶対にイヤよ」「お風呂が嫌いなのですか」「お風呂はウチの風呂が一番だわ。新しいし大きい」「大きさは普通どこの家の風呂も同じだよ」「そんなことはないわ、ウチの風呂は、バリアフリーになつていて、脱衣室も洗い場も、車椅子の人を二人で介護できるスペースがあるわ」「つまり旅行は行きたくないのですね。安上がりな人ですね」「旅行がイヤと言つていくわけではないわ」。二人共、「そうだね」と言わないので、延々と夫婦の会話が続く。時間がいくらあつても足りない。腰を据えてやり合う。世界一高い東京スカイツリーの話から、どんどん曲がつて、裸という次元の低い話になつて行つた。いつものことです。

アジサイとハーブの日

毎年六月は、開成町のアジサイと松田山ハーブガーデンのラベンダーが見ごろをむかえる。

「開成あじさい祭」に行つた。農道は観光客の長蛇の列だった。車椅子の人もある。アジサイはピンク、青、白が咲いている。きれいだ。後ろを歩いている人が「何もみる物がないわね」と言つた。

次に「松田山ハーブガーデン」に行つた。富士山や相模湾が一望できるハーブ園には百八十種

類以上のハーブが植えられている。ラベンダーは約五百本。甘い香りだ。すれ違った人が「草ばかりだねえ」と言った。

夫は、私の事を「イベントおばさん」と呼んでいる。おもしろそうな所には必ず出かけて行く。

青空、ひとりきり

井上陽水

楽しい事なら 何でもやりたい

笑える場所なら どこへでも行く

悲しい人とは 会いたくもない

涙の言葉で ぬれたくはない

青空 あの日、の青空 ひとりきり

コーヒーの日

夫の車で大井町山田の旧・第一生命に行った。食堂の前に一本「ハンカチノキ」がある。白い花が咲いている事を期待して、カメラを持って行った。残念な事に花は咲いていないばかりか、樹は半分枯れかけていた。損傷部分に布がまかれ二人の植木職人が、「どうしたものか」と話し合っているようすだった。「ハンカチノキ」の開花は五月。今はもう六月半ばだ。

元の第一生命の食堂は、「ブルックス」の大井町直売店になっていて、開店セールが開催されていた。店内では各種ドリップバッグコーヒーやコーヒー豆、紅茶、緑茶、健康茶、鰹節、海苔、割れ煎餅などが販売されていた。買い物をする時、セールのプレゼントに大きな包みが一つもらえた。中にドリップバッグコーヒーがたくさん入っていた。

「パンダのチョコボールは、ありませんか。中井町の工場直売店で販売していた物がほしいのですが」と訊ねると、「それは只今、準備中です」との事だったので、そのまま帰宅した。

「お茶にしよう。買って来たモカ・ブレンドを飲んでみましょう。お湯を沸かしてください。どのコップにしようかな。大きい方がいいね。お湯はまだですか」「今沸かし始めたからまだよ。そんなに急に沸くわけがないわ。オタクの奥サンが魔法使いのオバアサンだとよかつたのになね」。夫はコーヒーが大好きです。熱いコーヒーを飲みながら、クラシック音楽、特にモーツアルトを聴くのを趣味にしています。気分が落ち着くようです。

一週間後、東京から車で次女が来たので、また「ブルックス」に行った。娘は、インターネットで、第一生命保険大井事業所跡地（大井町山田）が、コーヒー・紅茶などの製造販売を行う（株）ブルックスホールディングス（本社・横浜市青葉区）に売却されたことを知っていた。

低気圧の通過後なので、樹の枝が散乱しているのを植木職人が片付けていた。娘は運転をしながら「なつかしいな、幼稚園や小学校の遠足で何回も来た。絵の展覧会もあったし、子供会のマラソン大会もあった。『ブルックス』は、この土地と建物、どうするのかしら」と、しきりに言っていた。町の誰もが、そう思っている。どのように活用するのだろうか。

買い物をした後で、売店の横の無料喫茶室に寄った。コーヒー、紅茶、日本茶が自由に飲める。この日は、ほとんどが女性客だった。実際に試飲して、また買わせる。飲食物や飲食店にはリピーターが不可欠だ。「ブルックス」はツボを心得ている。

みんなが大好きなコーヒーだが、私はコーヒーが嫌いです。その事を誰も知らないのです、今回も、夫や娘に付き合つて飲んだ。老後の面倒をみてもらう事を思えば、コーヒーの一杯には代えられない。ニッコリ笑つて飲んだ。なんのこれしき。「ま、まずい」。コーヒーが、「うまい」と言う人の気が知れない。

一年後、身近な場所で蜘蛛の観察場所を確保するために、再び「ブルックス」に行った。「ドングリ道」にはロープが張られ「筍を採らないで」という立札があった。大きな竹林だ。売店の裏は、ヒイラギの垣根になっていて、白い糸で巣を作つた蜘蛛が一匹いた。「五、六月のシーズンになれば、たくさん出て来る。この場所は、なかなかいい」と蜘蛛の研究者の夫が言った。

売店の入口付近に石碑があった。それは、第一生命が会社を立ち上げた頃、日曜日も返上して、ひたすら営業に励んだ一人の社員を称える碑だった。大きくなった第一生命を支えた功労者だ。高台の見晴らしの好いこの場所に建てたかった社長の感謝の気持ちしが伝わって来る。石碑の御披露目には、家族も招待されたことだろう。いろいろな想像をめぐらしてみた。しかし、第一生命は、この大切な石碑を移転した東京の本社に持ち帰る事はなかった。石碑はポツンと残されたまままだ。

◆平成二十四年、大井町の第一生命は「ブルックス」に売却された。譲渡額は約二十億円。六十万平方メー

トルの土地、地上十八階建て地下二階の建物が含まれる。

草むしりの日

庭の夏草を一日中むしり続けた。草むしりは趣味としてやっている。時々休んで青空を眺める。草むしりをした事がない人にはわからない至福の時です。昼食をはさんで、また、誰とも話さず、ただひたすら草をむしり続けた。太陽に照らされた黒い長靴を履いた足が焼けるようだ。

私を通った中学校では「労作」という授業があり、課題の一つに草むしりがあった。だから、草むしりを苦勞と思わない。授業の最後に、ノートにその日の内容や感想をまとめてから提出があった。私はいつも良い点をもらっていた。草むしりは楽しかった。この事だけでも、多感な思春期の教育が、いかに大切かがわかる。

昔、娘が言った言葉を思い出していた。「下宿に一人でいると一週間でも十日でも、誰とも話をしない事がある」と。娘は大学生の時、西千葉駅に近い千葉市中央区に下宿していた。近くには、ポートが浮かび古代ハスが美しい公園があり、上をモノレールが走っていた。大勢のホームレスがドラム缶のたき火を囲んでいた。

何も話さないのはいけない。そうだ、歌を歌おう。「青い風」(作詞…勝承夫 作曲…海沼實)「トますみの青空 はるばると 心もほがらな 青い風」を歌った。これは、昭和二十一年六月三十日からラジオ歌謡として放送された歌です。この歌詞なら、もっと穏やかな別の曲が付けられたでしょう。海沼實は、『みかんの花咲く丘』や『里の秋』などの童謡作曲家です。ラジオ歌

謡として作った作品は、この一曲だけです。ラジオ歌謡といっても、曲調は軍歌に近い。海沼實が、これ以上ラジオ歌謡を作らなかつたのは賢明でした。

草むしりを一日中無言でやっていた話を童謡の会ですると、「草むしりって、したことがある?」「あるわ」「そんなに楽しいの」「まあね」と言う会話が聞こえた。草むしりをした事がない人がいた。草むしりをした事がない人は、ぜひ我が家の庭の草むしりをお願いします。かわいいピンクの「ネジバナ」(らせん状にねじれて咲く。ラン科。草地、芝地に五月から九月まで咲く。十から四十センチ)を発見したら、ラッキーです。

地震の日

平成二十四年七月三日、NHKのアナウンサーが「なるべく無駄が無いように電気を消したり」と言つたので、テレビを消して休んだ。しばらくすると、ゆったりした揺れが来た。「地震だ」。一階にいたので外に飛び出した。となりの奥さんが、「地震よ、大丈夫?」と騒いでいた。地震はたいした事がなかった。町内放送が入った「只今、震度4の地震が発生しました。テレビやラジオをつけ、落ち着いて行動してください」と三度繰り返し返した。「落ち着いて行動して」と聞いて慌てた。胸がドキドキした。ゆったりした揺れだったのに、あれで震度4だったのか、と驚いた。わが家は築五十年だ。地震が一番恐ろしい。家の下敷きになって助けを求めている悪夢は、起きている時にも見る。

家にもどってテレビを観た。「十一時三十一分ごろ地震がありました。震源地は東京湾、百キ

口の深い地点、マグニチュードは5・4。この地震による津波の心配はありません。震度4は横浜、秦野市、小田原市、箱根町、熱海市、東伊豆町。震度3は松田町、中井町、大井町……」おや？ 大井町は震度3だ。再度、町内放送が入った。「只今、震度4と放送しましたが、3でした」。

地震はたいしたことなかったもので、すぐテレビは通常の番組に切り替わった。NHK『かんたんごはん』だ。メニューは「サケとズッキーニのかんたん南蛮漬け」。放送は、トマトを一口大に切る所からスタートした（トマトを切るのは簡単）。次にサケをほぐして食べやすくする（サケをほぐすのも簡単）。刻んだトマトに、ほぐしたサケ、南蛮漬けを混ぜ合わせる（混ぜるのも簡単）。最後に塩、こしょう、オリーブオイルで味を調え、パセリ、または青じそをふりかける。おお、本当に簡単料理だ。私のいつもの料理より簡単だ。しかし、実際にはズッキーニ、タマネギ、サケの下ごしらえの説明が地震放送のため欠落したので、この料理番組を見ていた人は、簡単料理と誤解した。

『かんたんごはん』が五分ほどで終わると、「地震放送のため、背中と二の腕を引き締めるエクササイズをお伝えできませんでした」と、立派な体格の女性アナウンサーが、いかにも残念そうに陳謝した。この大柄なアナウンサーを見たのは初めてだった。そして、お昼のニュースになった。

あきれた日

「民主党分裂」「新党結成」。国民は、あきれている。東日本大震災の被災地のおばあさんが、NHKのインタビュアーに「なに遊んでんだかよ」と言った。

節電の夏。「再び計画停電もありえる」と報道があつた。「昨年は、東京都だけ計画停電がなく不公平だった」と言う東京電力管内の住民からの不満の声に、東京都の石原知事が誰も思いつかなかつた事を言い出した。「節電には、自動販売機を撤去すればいいんだ。これは、一日中電気を食っている。莫大な電気料金だ。缶コーヒーなんて、コンビニで買って飲めばいい」。この意見には、東京都民だけでなく日本の国民全員が「なるほど」と思った。私は、石原都知事が「ホームレスは、仕事があれば老人介護施設で働けばいい」と言つた時、「無責任な事を言う人だ」と怒つたが、この自動販売機撤去の意見には賛成です。しかし、慌てたのは自動販売機の会社や飲料水のメーカーだった。すぐに電源を落として対応した。その結果、自動販売機は撤去されて

モントブレチアが咲いた日

輝く夏はモントブレチア。焼けつくようなオレンジの花。好きな花。平成二十二年もモントブレチアの咲く猛暑の夏だった。一時間に一本の神奈川病院行きバスに乗って、危篤の人を見舞う男性が、バスの隣りの座席に座つた私に「毎日じゃ、こっちの身がもたねえな」と話しかけて来たのを思い出していた。この男性が見舞つていた人も、かけがえのない大切な人だったと思う。男性は疲れ切っていた。「あなたと話して元気が出ました」と、バスから降りて病院の中に消えた。この事を夫に話すと、「その男性は正直な人です」と言つた。私の父と母は、私の必死の介護で「なんとか夏を乗り切つた」。二人とも九十五歳になっていた。

松に驚いた日

川音川は、昭和三十四年（一九五九年）に伊勢湾台風が来た時、橋のあたりの堤防が切れそうになった。松田町、大井町の人々が出動し、一晩中、土嚢を積む作業を続け、決壊を防いだ。父も参加した。以後、堤防はコンクリートで強化された。あれから五十年以上も経ち、堤防が決壊しそうだったことを覚えていた人は、ほとんど居なくなつた。私はこの時、八歳だった。

東日本大震災の津波で日本松原の松が「根性松」の一本を残して壊滅した。防風林、防砂林として各地に植えられている松は、「それほど弱いのか」と改めて全国の人々が認識した。

二宮金次郎は、寛政十一年、自分で働いたお金で松苗を二百本買い、酒匂川の土手に植えた。私は小さい頃、「あれは、二宮金次郎さんが植えた松だよ」と老人が話すのを聞いた覚えがある。ところが、平成二十三年九月八日付けの神奈川新聞に掲載されていた「尊徳先生教えて」という記事を読んでいて驚いた。

神奈川県小田原土木事務所によると、酒匂川の堤防の松は現在九百七本ある。樹齢が百年程度と推測されることから、金次郎が治水のため植えたものではなく、明治期に入って、その遺志を引き継いだ地元住民が植えた二代、三代目らしい。「なるほど」と納得した。

避暑地で遊んだ日

猛暑の夏。平成二十四年七月の月末、長野県諏訪郡・富士見高原スキー場「ゆりの里」で遊んだ。標高千二百五十メートル、高原リゾートだ。富士山を斜め横から見る事ができる。ほっそり

とした見た事も無いスリムな富士山だ。そして北岳、駒ヶ岳、北アルプスと続く。

色とりどりのユリは、今が満開。その色と数に圧倒される。白樺と青い空も美しい。青い空を何枚も写真に収めた。冬はスキー場なので、当然リフトがある。犬を連れた観光客は、犬を抱いてリフトに乗る。リフトが理解できていない犬の恐怖は、いかばかりか。

ヒルサイドホテル富士見に宿泊した。「火星ちゃん」の愛称で親しまれる常陸宮正仁親王・華子妃ご夫妻が、昭和六十一年五月三十日から六月一日まで二泊利用されたホテルだ。若々しい写真が食堂の前に掲げている。暖房の設備はあるが冷房の設備は無い。なくても涼しい。外に出ると寒い。ホールにはピアノがある。のんびりと大勢の観光客がくつろぎ楽しんでる。広間では宴会もある。三笠宮崇仁親王妃の百合子様も、「ゆりの里」に、おいでになるといいと思った。名前に「百合」の字がある。

これほど豪華なホテルも、若者のスキー人口の減少、雪が降らない温暖化の影響などで、九月で閉館になる。「秋は紅葉がすばらしいのです。残念ですが」とフロントの受付嬢が客の一人一人に挨拶していた。

平成二十四年十二月二日、山梨県大月市笹子町の中央自動車道上り線笹子トンネルで「笹子トンネル天井板落下事故」がおきた。走行中の車が巻き込まれて九人の人が亡くなった。悲惨な事故です。

このトンネルは長い。小田原方面から行くと、最初に富士五湖道路の籠坂トンネル（片側一車線）を通り、次に広くて長い笹子トンネルを通過して「ゆりの里」に行く。私は、トンネルの度に

目を閉じて手を合わせて祈った。「お母さん、何しているの？」と娘が訊いた。娘はずっとペーパードライバーで、昨年運転を再開したばかり。さらに、イギリス製の二人乗り、天井が開閉する小さいスポーツカーだ。大きなタイヤの運送トラックや高速バスが追い越す時、恐ろしい運命にある。

「事故は、あの時のトンネルですか」という私のメールに対して、娘が返事をくれた。

「まだ、通行止めようですね。恐いね。でも、こういうのは運だから、避けようがないからね。私たちは運がよかったという事で」。

私はゾツとした。童謡の会で、「娘の車で行ったんですよ。あまりにも長いトンネルなので、何か起きませんようにと、あらゆる神様をかき集めて祈ったのですよ。手を合わせて拝む事って、久しぶりでした」と、その時の様子を話して笑いを取った事を思い出していた。「とても好かったので、みなさんも、ぜひ来年行かれるといいですよ。開花時期やホテルはインターネットで検索するのが便利です」と勧めた。

私は、「ゆりの里」に行った時、笹子トンネルの中央部分で、故障車が路肩に止まっていて、後部が車道に突き出た止め方だったのを思い出していた。女の子が二人車の外に出てレッカー車を待っていた。「故障車かしら、危ない止め方だね。接触したら大きな玉突き事故になるね」と言っていて通過したのを覚えている。しばらくすると、反対方向から、けたたましいパトロールカーに続いて処理車が、猛スピードで行った。どこにいても、「死ぬ」と「生きる」は紙一重だ。私は今、助かったからといって喜ぶ気分は全くない。

縁日

セミ時雨しぐれの中、松田山に登る。延命寺の参道を行くと、いつも小さな犬を連れなおじいさんに会った。先に「こんにちは」と、あいさつをされるので、「かわいい犬ですね」「時間になると散歩の催促をするので」などと立ち話をした。寺の近くのおじいさんの家は、庭木に囲まれた古い平屋の一軒家。昔は農家だったのでしよう。入口に大きな物置があります。時々、赤い乗用車が来ています。娘さんでしょうか、家の中から笑い声が聞こえます。そうして、何年も過ぎた。去年、家や物置が解体され、庭木も無くなり更地になった。土地は三つに区切られ売りに出された。おじいさんが亡くなったのでしようか。更地は夕日に照らされて静か。

今日行ってみると、新しい二階家が三軒建っていた。どの家からも子どもの歓声が聞こえ、入口に水遊びの道具が干してある。寺の参道を行っても、小さな犬を連れなおじいさんに出会う事はなかった。

今日（平成二十四年八月九日）は「延命寺四万八千日」（縁日）。花火が鳴った。前日電氣屋が準備していた提燈くどくに灯りがともる頃、大勢の人が参拝に訪れる。この日にお参りをすると、四万八千日分の功德ほとくが施ほとくされると言われている。テントが張られ、境内に出店が並ぶ。焼きソバ、焼きトウモロコシ、たこ焼き、綿菓子、ジャガバター、水飴、焼きイカ、焼きリンゴ、ベトベトする物ばかりだ。喉が渴く。この祭りを、みんなが楽しみにしている。おじいさんも参拝したはずなのに。縁日にセミの声、立秋を過ぎたのに暑い。祭りは楽しくて、悲しい。

過ぎた日

『少年時代』（作…井上陽水）「♪夏が過ぎ風あざみ 誰のあこがれにさまよう 八月は夢花火 私の心は夏模様」。お彼岸が過ぎてまだまだ暑い。夜中に台風が通過したので雨に洗われた景色が目にも鮮やかだ。リンドウを売っていたので買った。

リンドウをお墓に供えた。私は一ヶ月に三、四回お墓に花を持って行く。毎日行く信心深い人から見れば、威張れることではないが。リンドウを見てすぐ買う事にしたのには訳がある。

テレビ時代劇『木枯し紋次郎』では、紋次郎（演…中村敦夫）が一年に一度、姉（お光）の祥月命日つぎめいじちに墓にリンドウの花を手向ける。それを見た村人は、「渡世人が花なんか持つて」と、いぶかる。姉は口減らしで殺されそうになった紋次郎を助けた。紋次郎は姉をしたっていた。嫁に出された姉は、その後死んだ。紋次郎が十歳の時のことだった。姉が死んだ知らせを聞いた紋次郎は嘆き悲しんだ。家を出て渡世人になった紋次郎は姉の命日には刀を抜かない。人を切らない事になっている。律儀なヤツだ。そんな日に限って関わりたくない事件に巻き込まれてしまう。

「あつしには、関わりのねえこつて、ちよつと道を、あけておくんなさい」

「渡世人には明日という日は、ござんせん。今日が、いつも、おしめえの日だと思つて おりやす」。台詞の中に、紋次郎が「二十二年流れ歩いてる」と語るシーンがあるので、この時の年齢は三十二歳ということになる。紋次郎がリンドウを持って姉の墓に参るシーンは、美しい。私は気に入っている。しだいに頭の中で「リンドウは木枯し紋次郎の花」となった。せつない花だ（新木枯し紋次郎 第二話「年に一度の手向草」）。

インターネットの日

平成二十四年十月七日は、御殿場線の線路むこうにある大きな神社、日枝神社のお祭り日だ。天狗を先頭に、神輿を担いで練り歩く。男衆のかけ声は「やいとうさっせ」という珍しいものです。童謡の会で『村まつり』と『おまつり』を歌った。小田原市から来ている会員が「神社の名前は何と読むのですか」と訊いた。通称「ひえい神社」と思っていたが、インターネットで検索すると、「ひえ神社」だった。「日〓ひ」と「枝〓え」漢字そのままだ。東京都千代田区には、六月上旬から中旬ごろ「山王のまつり」というのがある。日枝神社（山王）のお祭り。さらにインターネットで検索すると「三嶋神社」が二つあった。大井町上大井と大井町金手にもある。金手にあるのは「三嶋神社」のはずだ。

昼ごろ、黄色の菊の花を買って「三島院」に行き墓に花を手向けた。帰りに「三島神社」に行った。神社拝殿に「三島神社」と書いてあった。「そうだよねえ」と、ひとり言を言った。ホッとした。私は小さい頃、この神社で遊び育った。ラジオ体操にも欠かさず通った。「三島院（金手）」「三島神社（金手）」「三嶋神社（上大井）」は正しく存在していた。

時間が経つにつれて、インターネットの間違い情報が気になった。「三島神社（金手）」を「三嶋」という漢字で書かないでほしいと思います。この事だけでなく、インターネットは子どもたちも検索するので、大人は書く内容に責任を持ちたいものです。

「日枝神社」の敷地内には「河原自治会館」があり、「三島神社」の敷地内には「金手自治会館」の建物がある。地域や子供の会の行事、選挙の投票会場になる。宗教上の理由で鳥居をくぐれない

から自治会館で行われる行事には全て欠席するという人がいるが、鳥居をくぐらなくても、公の場である自治会館の建物の中に入る事はできる。

子供会の会議の後、欠席した人にプリントを届けに行った時、「宗教上の理由で欠席してしまふのは、いけないことです。子供会の役員が決まらなくて、みんなが迷惑をしました。他人に迷惑をかけないという教えが、どの宗教にもあると思います」と、その人に言わなかったことを後悔している。近年、どの地域の自治会館も、きれいな建物に建てかえられている。みんなが楽しく集う場所になっている。

『空には本』の口

寺山修司歌集『空には本』（的場書房）一九五八年刊。当時の定価は四百円。現在、初版は古本屋価格で二十万円。これは買えないので復刻版三千五百円を買った。

「これから、五・七・五・七・七、短歌の勉強をするよ」と言うと、夫が「僕の大学の時の友だちで石川啄木の熱狂的なファンがいて、彼は寺山修司も好きだった。しかし、彼が作っていた短歌は見せてもらったことがない」と言った。

秋の夜長、一気に本を読んでから私も短歌を一つ作った。つまらない、箸にも棒にもかからない歌ができた。丸めてゴミ箱に捨てた。

「ピアノストが楽々とピアノを弾いている所を見ると、自分もピアノを弾いてみたくなるのと同じように、他人の優れた短歌を見ると作ってみたくなるものです。しかし、おいそれとできる

ものではありません」と夫が平気で言った。「そうだね」。短歌は以後作っていない。

「寺山修司は石川啄木の影響を受けている。啄木の短歌は三行でしたが、寺山修司はどうでしたか」「一行よ」「そうでしたか。啄木は三行にしたのがすごいね。日記もローマ字で書いていたし」「二人共、父親の死を詠んだ歌が原点になっている」「啄木は母親を詠んだ歌が有名だね」「そうだね。いいよね」。ひとしきり石川啄木と寺山修司の話で盛り上がった。

「二つ作ったぐらいではダメです。百とか千とか作って、一ついい物が生まれるのです」「そうだね」。

俳句、短歌、詩、ラジオドラマ、演劇、映画、評論、競馬のコラム……ジャンルを超えて表現し続けた寺山修司が亡くなってから、もう三十年近くになる。生前、「思い出される人より、忘れられない人になりたい」と言っていた。言葉の人、寺山修司（一九三五年～一九八三年）。忘れられない人です。

池田小百合選『空には本』寺山修司歌集より

- ・ ころがりしカンカン帽を追うごとくふるさとの道駈けて帰らむ
- ・ 歳月がわれ呼ぶ声にふりむけば地を恋う雲雀はるかに高し
- ・ 夏蝶の屍をひきてゆく蟻一匹どこまでゆけどわが影を出ず
- ・ 跳躍の選手高飛ぶつかのまを炎天の影いきなりさみし
- ・ 列車にて遠く見ている向日葵は少年のふる帽子のごとし

- ・わが胸を夏蝶ひとつ抜けゆくは言葉のごとし失いし日の
- ・空のなかにたおれいるわれをめぐりつゝ川のごとくにうたう日日たち
- ・駆けてきてふいとまればわれをこえてゆく風たちの時を呼ぶこえ

文化の日

文化の日には、文化勲章の親授式がある。受賞者は功績を称えて高齢の人に決まっている。ところが、今年には人工多能性幹細胞（iPS細胞）の開発でノーベル医学生理学賞の受賞が決まった、京都大学教授でiPS細胞研究所長の山中伸弥さんが受賞した。年齢は（五十歳）と若い。これらの活躍が期待できる。

このほか、国際法学・国際貢献の分野で東北大学名誉教授の小田滋さん（八十八歳）、日本画の松尾敏男さん（八十六歳）、映画監督の山田洋次さん（八十一歳）、植物分子細胞生物学・植物バイオテクノロジーの京都大学名誉教授の山田康之さん（八十一歳）、美術評論・文化振興の元京都造形芸術大学教授の高階秀爾さん（八十歳）の六人。

天皇陛下は、退席時に山中さんに「ノーベル賞、おめでとう」と声をかけられた。NHKテレビ夜七時のニュースを見ていた私は、天皇陛下がお元気なので安堵した。体調を心配した夫が「天皇には退職がないのかな」と言った。

天皇は、小さい時、側近の人から戦争について話を聞き、心を痛めて育った。海外での挨拶で、「先の戦争で、日本は」と必ず反省の言葉を口にされる。日本の国民から信頼されている理由の

一つだろう。しかし、「皇室なんか、大嫌い」と叫ぶ人もいる。民主主義の世の中、皇室のありようについても、みんなで議論をしたい。

紅白歌合戦の日

平成二十四年、演歌がポップスやロックに圧倒された『NHK紅白歌合戦』でした。今ではヒップホップダンスが学校の授業になっている。「EXILE」のような手足の大きい男たちの集団が歌って踊ると圧倒される。

審査員が、おもしろい顔ぶれだった。女優の樹木希林、落語の六代目・桂文枝、レスリング選手の吉田沙織、水泳選手の入江陵介、サッカー選手の澤穂希、大相撲の横綱・日馬富士、歌舞伎俳優の中村勘九郎、『花は咲く』を作曲した作曲家の菅野よう子などに交じって教育評論家の尾木直樹（尾木ママ）がいた。法政大学教授、早稲田大学客員教授。臨床教育研究所「虹」主宰。教師時代に「教師の立場では現代の教育現場を変えられない」と感じ、退職して評論家になったという。女性のような物腰や柔らかい口調から「尾木ママ」という愛称で親しまれている。もともと、教師時代に女子中学生と交換ノートでやり取りしているうちにオネエ言葉になってしまったらしい。

放送中、タレント同士のつまらない会話がいった。「あんたの顔、しわだらけだねえ」「うるさいわねえ」「しわがいっぱいよ」「関係ないでしょ」。ラジオの司会をしていたテリー伊藤というタレントが、オネエ言葉を使うタレントのクリス松村をいじめた。これを「尾木ママ」は、どの

ように聞いていたのだろう。立ち上がって「そこ、おやめなさい」と言ったらカッコ好かったのに。世界中で見たであろう「あれ」は、いじめではなかったというのか。

「まあまあ、そう硬い事を言わないで、ちよつとふざけただけよ」「そうですか」。ふざけていいのか、いじめているのか、見分けるのは難しい。私は、いじめと思ったが、生徒や学生の自殺者が出て、学校や教育委員会は、なかなかいじめと認めないのは、このような状況なのだろうと納得してしまった。それにしてもテリー伊藤は下品。NHKにしばしば出る。NHKの質が問われる。

『上を向いて歩こう』は暗い歌だ。暗く歌った徳永英明は、詩や音楽をよく理解している。演歌歌手の北島三郎は七十六歳。まだまだ歌える。「化け物だね」と夫が言った。

ドラムもダンスも素晴らしいミッキーマウスの動きに拍手だった。階段から落ちなかっただけでもすごい運動能力だ。今年も、おもしろい紅白歌合戦だった。時には手拍子をし、時には踊りながら歌い楽しんだ。若返ったような気がした。

年をいただく日

福島県伊達郡霊山町の「みさとユースホステル」がテレビで紹介された。「おかあさん」と親しまれる高齢の管理人が、来客の誰かが作ったという『みさとの歌』を歌った。若々しい歌声に驚いた。昔は大勢の若者と毎日のように歌ったそうだ。

「正月に年をいただくから、きれいに掃除をする」という言葉が印象に残った。「年をいただく」

とは、初めて聞く言葉だ。気に入った。年を取る事を嫌う人、恐がる人には、この「年をいただく」という言葉を教えてあげたい。みんなで年を取れば恐くない。昔の年齢は数え年だったから、正月に日本全国の人が一歳年を取った。暮れに家中を清掃し、正月に晴れ着を着て御馳走を食べ生きていくという健康を祝った。

しかし、インターネットで検索すると、「当ユースホステルは、特定避難勧奨地域が点在する地点にあります。営業は致しておりますが、この地域の住人は時々放射能のない所でリフレッシュする必要がありますので、時々休館いたします」と書いてある。福島原発の放射能漏れの影響は人々の生活を変えてしまった。原発事故がなければ、復興はもっと進んでいるはずだ。

年賀状の日

年賀状ほどおかしな物はありません。まだ新年でもないのに、暮の忙しい時に、年賀葉書を買った、のんびりとした元旦の気持ちになって抱負を書き連ね、ポストに投函します。

それは小学校の国語の時間に、「遠足にまだ行っていないのに、行ったつもりになって作文を書く」のに似ています。指導に当たっている先生の中には、新しい試みと思っている人があるようです。すでに昔から年賀状で行なわれていることです。

私の場合、小学校の頃は親のまねをして年賀状を書いて出しましたが、ある年、ポストに投函した年賀葉書が、暮の内に相手に届いてしまい「早々と年賀状をいただきました」と、笑われた事がありました。それ以来、年賀状は自分から書かなくなりました。

しかし、五十歳を過ぎると、仕事柄、毎年たくさんの方の年賀状が来るようになり、正月に返事を書くだけでなく、暮に年賀状を書くようになりました。年賀葉書は夫と二人で千枚買います。書くようになった理由はいくつもあります。まず、相手から来る年賀状は、絵手紙や版画、写真入、毛筆など個性的で工夫があります。しだいに元日にもらう年賀状が楽しみになりました。自分も楽譜の入った年賀状を作るようになりました。

中学の恩師からは毎年返事を書かなくても来ています。私の事を心配してくださっているからです。先生は退職され、世界を旅行して元気にされていることが年賀状でわかります。

夫は暮に毎年欠かさず年賀状を書いています。特に、高齢の人には、必ず書くようにしています。ある年の暮れ、「年賀状は、めんどろだから書かない」と言う私に、「友だちを失いますよ」と言いました。その一言に動かされ、急いで年賀葉書を買に行きました。翌年からは、私も友人、知人、お世話になった人に年賀状を書くようになりました。

高齢になったからという理由で年賀状を書くのをやめてしまう人がありますが、年賀状は元気に暮らしている事を確かめ合うものです。健康で年賀状が書ける事は幸せな事なのです。クリスマスケーキを食べながら年賀状の文面を考え、師走の町のポストに年賀葉書を出しに行くのが日本の文化です。